

Genius

English Communication

Genius English Communication から
始まる本物の学び

松尾美幸



■はじめに

Genius English Communication (以下 *Genius EC*) I を使って授業を行うようになって4年になる。採択当初は、「本校の生徒たちには高度すぎるのではないか？」という懸念も英語科スタッフの中にはあった。しかし、「内容が面白ければ生徒たちは自ら学ぶ」という信念と、学習到達目標、教授方法を全員で共有して指導した結果、教員側の心配をよそに、*Genius EC I* から *Genius EC III* を使って英語学習を全うした初代 *Genius* っ子たちの約8割が「英語の勉強が好き」と胸を張って答えて卒業した。高校入学前は英語が苦手で嫌いだったというある生徒はこう話した。「一読しただけでは英文の意味が曖昧でも、授業中に霧が晴れてぱっと視野が広がる瞬間があるのです。その快感がやみつきになって、もっともっと英語を勉強したくなるのです。」英語力が“genius”とは断言できない(失礼!)勤務校の生徒たちに、英語学習が「やみつき」と言わせる秘密は何か。授業者として、また改訂版からは編集に関わった者の1人として、*Genius EC* の魅力を「3つのG」に沿って考えてみたい。

■ Genuine Communication

本物のコミュニケーション(技能・スキル)

Genius EC を採択した大きな理由の1つは、言語活動の組み立てが第二言語習得の理論にかかっており、4技能統合型の英語による授業に適していると確信したからである。リスニングとキーワードの導入からなる Warm Up で、学習者を

課のトピックに引き込み想像力をかき立てる。英文が書かれた目的に応じた読解活動を経て、パート毎に用意されたコンセプトマップを用いたストーリー・リテリングや口頭要約等のペア・グループワークにつなぐことができる。また、更に自由度の高いスピーキングを促すディスカッションやプロジェクトのためのテーマが各課に設けられ、思考を伴う協働的活動へと自然に発展させることが可能だ。「言語活動と言語活動をつなぐ」構成をなぞることで、「生徒と生徒をつなぐ」やりとりが豊かな授業が実現する。

■ Global Issues 本物の題材(知識・理解)

どんなに興味深い題材を扱っていても、生徒と教材の関わりが単に字面をなぞるだけで終わってはいはもったいない。生徒が教材と真正面から向き合い、自分の頭と心を揺さぶられる体験ができるか、すなわち「生徒と教材をつなぐ」深みのある授業ができているか。この問いかけに応えてくれるオーセンティックな題材が豊富なことも *Genius EC* の強みである。

例えば、*Genius EC II* の5課は、宮沢賢治の研究家・翻訳家として知られる Roger Pulvers 氏の書き下ろしである。生徒は同じ日本人として賢治の作品に込められたメッセージを読み解くと同時に、その中には真のグローバリズムを考えるヒントが潜んでいることに気づき驚くだろう。それを外国人筆者のことばを通じて知る経験は、自国文化理解と異文化理解が融合したような不思議な感覚を伴った忘れえぬ体験となるだろう。

Genius EC I の10課は、第二次世界大戦中にナチスの占領下で、自らの命を危険にさらしながら多くのユダヤ人の子どもの命を救ったポーランド人女性イレーナ・センドラーさんが主人公である。ホロコーストの悲劇について読み、生徒たちは戦争や差別の愚かさについて考える。そして翌年、*Genius EC II* の4課で、イスラエル兵に殺された息子の臓器を、病気で苦しむイスラエル人に提供したパレスチナ人の父親について学ぶ。苦悩を乗り越え、相互理解と平和を求める決断をした父親の心情について読むことで、生徒たちは人類共生の難しさと尊さを改めて認識するだろう。

筆者がこの課を授業で扱っていた時、リアルタイムでイスラエルとパレスチナ間の紛争が悪化した。紛争解決について安易に話し合えない程の状況に胸を痛めつつ、パレスチナ人、イスラエル人双方の複数の若者の手記を、本課とテーマを連携した多読教材 Read On! の英文の出典から探した。ジグソーリーディングの後に生徒たちは、「自分の友人の思い」の形で相互に内容を報告し合うという活動に取り組んだ。「先生、ヤバイよ、泣きそうだよ。」と言いながら「友人」の状況や思いを必死に英語で伝える男子生徒の姿が印象的だった。グローバルな問題を身近なものとしてとらえ、共感できる生徒。問題意識を持って自ら知識の収集に努め、問題解決に向けて意見を発信する力を持った生徒。その育成には、「生徒と実社会・世界をつなぐ」本物の題材が不可欠である。

■ Genuine Learning 本物の学び（姿勢・情意）

豊かな知識や高度なスキルがあっても、バランスのとれた健全な世界観を育まずに、多文化共生・共存に貢献しうる人材は育成できない。改訂版 *Genius EC I* では7課でスポーツにおける男女差別を乗り越えたラスティ・カノコギさんを、Read On! 7では黒人メジャーリーグのジャッキー・ロビンソン選手を扱っている。差別のテーマは *Genius EC II* の10課、アパルトヘイト体制

下の南アフリカで公正な報道姿勢を追求し貫いた白人ジャーナリストの物語に引き継がれる。今も存在する様々な差別、そして平等、正義について真剣に考える好機となるだろう。

改訂版 *Genius EC II* で新たに登場した教材を2つ紹介したい。7課は、今年2月に亡くなったディック・ブルーナさんと、彼が生んだ「ミッフィー」が題材である。可愛いうさぎのキャラクターとしてしかミッフィーを知らなかった高校生たちは、ブルーナさんの子どもたちへの温かい愛情ゆえのこだわりや、シンプルなアートの込められた深いメッセージに驚くだろう。同じく Read On! 7は、日本が世界に誇るバレリーナの森下洋子さんが題材である。ブルーナさん、森下さんの両氏が芸術に向き合う姿勢は奇しくもオーバーラップする。「昨日よりも上手になりたい。」と英語を学ぶ高校生たちが「教材と自分をつなぎ」、自らの外国語学習に対する姿勢と重ね合わせつつ学んでくれたらと願う。

■ おわりに

Genius EC は、「世界がもし100人の村だったら」をプロローグとした3カ年にわたる壮大な地球絵巻である。今回の改訂により、題材の深み、厚み、広がりはそのままに、語彙や英文の複雑さのレベルを下げることで、生徒たちが学びやすい教科書となった。同時に、教員にとっても教えやすく、読解を超えた先の活動を編む余裕を楽しめるようになったと感じる。*Genius* がくれる教材の1つ1つが、高校生たちにとってかけがえのない幾多の「つながり」を生み、縦糸・横糸の密なカンバス地を形成してくれるはずだ。その上に、生徒たちが自由な世界観で思い思いに絵を描く、そんな授業を展開していきたいと願いながら、教壇に立つことが楽しくてたまらない毎日である。

（まつお みゆき・岩手県立福岡高等学校教諭）